



タイトル 住んでみたヨーロッパ
9勝1敗で日本の勝ち

著者 川口マーン恵美 (かわぐちマーンえみ)

出版社 講談社+α新書

発売日 2014年9月22日

ページ数 222ページ

「住んでみたドイツ 8勝2敗で日本の勝ち」に続く比較文化論、第2弾です。この本を読むと、我々日本人が夢のような国に住んでいることがよくわかる。

日本人が憧れるヨーロッパの文化、街並み、そして生活レベル。しかし、本当のところはどうなのか？ 街には泥棒が溢れ、古い街並みは奇妙に改悪され、馬の肉が牛の肉になり、日本人ならとても、生きてはいけないのでは？

神話から繋がる日本の歴史。争わず、穏やかに、時代を紡いできた知恵と手腕。「和を以て貴しと為し、忤ふること無きを宗とせよ」という聖徳太子の「十七条憲法」は、今も私たちの心の中に生きている。それらすべてが、日本という国の奥深さを作っている。

本書を読んで、ヨーロッパから見た日本の姿を再確認して欲しい。おそらくそれは、かつてヨーロッパ人が憧れた「ジパング」と同じはずであると著者は言う。

さっそく、目次をみてみよう。

まえがき

- 第 1 章 泥棒天国ヨーロッパ
- 第 2 章 エアロビのできないドイツ人
- 第 3 章 不便をこよなく愛すノルウェー人
- 第 4 章 スペインの闘牛と日本のイルカ漁
- 第 5 章 ケルンの地下鉄建設と池袋の道路工事
- 第 6 章 日本の百倍ひどいヨーロッパ食品偽装
- 第 7 章 日本的になったドイツの宗教事情
- 第 8 章 歴史の忘却の仕方——ヨーロッパとアジア
- 第 9 章 奴隷制度がヨーロッパに残した「遺産」

第 10 章 歌舞伎と瀕死のオペラを比べて

第 11 章 同性愛者が英雄になるヨーロッパ

第 12 章 「移民天国」か「難民地獄」か

第 13 章 EU はローマ帝国になれるか

終 章 劣化するウィーン・パリ・フランクフルト vs. 進化する東京

あとがき——ヨーロッパのジャポニスムはいまも健在

ここ 20 年ぐらい、ずっと私たちが責められ続けている南京事件や慰安婦や靖国神社に関しての韓国と中国の言い分には納得できない。

南京大虐殺 30 万人は酷い嘘だし、慰安婦の件でも組織的な強制連行や奴隷労働などはありません。これが本当だと思っている日本人は、勉強不足なのである。

だいたい日本は、戦時中に本当にあった不法行為に関しては反省し、謝罪し、賠償金代わりの多くの援助も支払っている。それどころか、犯してもいない犯罪についてまで謝った情けない政治家もいる。

それでもなお不誠実であると言われればどうしようもないが、日本人が不誠実であるという認識は、少なくとも私にはないと著者はいう。ドイツと比べても、誠実さで引けは取らないはずだ。

だからこそ、謝罪の問題は、「すでに謝りました」ではなく、「**なかったことについては謝りません**」ということをはっきりと、皆にわかるように言った方が良い。

そもそも、日本人が不誠実なら、日本はこれほど健全な発展を成し得なかったはずだ。皆が思いやりを持ち、助け合ってきたからこそ、戦後の経済発展の果実が、一握りの人間の手にだけ落ちることなく、国民全体の富として行き渡ったのである。

また我々は、国内では誠実、外国に対しては不誠実などと態度を使い分ける器用さも持たない。そもそも二股をかける事さえ、大変不得手な民族である。

ヨーロッパの国の人々は、複雑な外交をしながら生き延びたり、滅びたりしてきたので、平気で七股ぐらいかける。それが歴史的伝統とも言える。

戦後、そろそろ 70 年。時代は移り、世界の情勢も変わり、平和的な民主主義国家である日本が、様々な形で国際社会に貢献するようになって久しい。それなりに努力してきた。だから、過去のことを責めたてるのは、もう、そろそろ終わりにして欲しい。それが大方の日本人の気持ちである。

ところが、それがうまくいかない。先方は、終止符を打つことをひたすら拒んでいる。そのうえ悲しいことに、日本人の**罪はますます水増しされていく**。

ここまですべてがうまくいかないということは、日本人のこれまでのやり方、つまり、穏便に控えめにというやり方が間違っていたと考えた方が良い。こちらが引けば引くほど突進してくるのが、彼の国の人達のやり方のようだから、このままでは和解のチャンスは

永遠にめぐってこないだろう。

靖国神社に至っては、なぜ、参拝を非難されるのかさえ、理解できない。戦後これまで、私たちが平和に暮らしてこられたのも、これほど豊かになれたのも、過去に、体を張って国を守ってくれた人達がいたおかげだ。

戦争は良いことではないが、当時の状況で、エネルギーを絶たれたまま、アメリカの挑発に対して、日本がただただ平和主義を唱えていたなら、列強がワッと寄ってたかって、日本は早晩、アメリカかソ連かイギリスの植民地になり、その後 15 年ぐらい経って解放され、今のフィリピンのような感じになっていたに違いない。

靖国神社には、それを防ぐために戦い、死んでいった人たちが ^{まつ}祀られているのだから、今でも感謝のお参りに行く人がいるのは当然だ。戦争には負けたが、植民地にはならなかったのは彼らのお蔭なのだから。感謝の気持ちには、政治家と一般人の区別など無い。参拝に関して、これ以上とやかく言われるのは内政干渉である。**もともと問題のない所に解決のあろうはずもない。**

戦前、戦中のドイツ人は、加害者ではあるが、詳細を見るなら、終戦のころより後は、同時に被害者でもあった。いろいろ非道なこともされ、悲しい思いもしている。

しかし、それを語り継ぐとき、ドイツ人は、そこから個人的感情を切り離す努力を惜しまなかった。悲しみは 1 人 1 人の心の中に残っていても、「加害者を恨み続けろ」とか、「皆で加害者を探し出し、落とし前をつけてもらおう」という方向には決して行かなかった。

悲しみとはなるべく距離をとった方が、気持ちが楽になるということ、ドイツ人は良く知っていたのだろう。

過去から学ぶというのは、過去の失敗を、未来を良くするために生かすという意味であり、まずは過去の出来事を客観的に捉える事から始まる。感情の移入は極力抑え、反省すべきところを探し、過ちを繰り返さないようにすることだ。

ドイツとフランスは、かつて犬猿の仲だったのは有名な話である。第二次世界大戦後も国境を接しているとはいえ、ドイツとフランスの距離は限りなく遠かった。

和睦の意志は、1963 年、仏独協力条約（エリゼ条約）として結実する。フランス人を宿敵だと思っているドイツ人は、もういないだろう。それどころか、いま、この両国の関係は、有史以来初めてと思われるほど揺るぎない。

なぜ、和解が可能だったのか？それは、両国が過去のことを忘却してしまったからだという。正確に言うならば、次世代には史実を伝えるだけで、過去の恨みを語り継がなかったからである。

イギリスで奴隷制度がようやく廃止されたのは 1833 年のことである。その時奴隷のオーナーに賠償金も支払われた。

時は流れて、2013 年 11 月、ジャマイカなど、カリブの 14 か国が、奴隷制度による被害

の賠償をイギリス、フランス、オランダの三国に求めることを決めたという。

これらの国には、アフリカから連れてこられた奴隷の子孫が多く住む。16世紀から始まった奴隷貿易で連れてこられた奴隷の子孫である。

その後、奴隷制度はなくなったが、しかし現在、これらの国の発展が壊滅的に遅れているのは、奴隷制のせいだというのが彼らの主張だ。

宗主国といわれている国々は、それまでの二百余年のあいだ、植民地にした地域から、資本も、生産手段も、教育の機会も、すべて奪い、アフリカから連れてきた奴隷を「しゃべる家畜」としてこき使っておきながら、突然、解放という名のもとに放り出したのである。

すべてを奪われていた人々は、唐突に与えられた自由を、上手く活用できなかった。過酷な過去の負の遺産は、未だにこれらの国の正常な発展を妨害している。つまり、彼らが今、直面している困難の原因は、奴隷制と植民地化である。だから賠償金を支払えと言うわけである。

まるで間違った理論だとは思わないが、少し月日が経ちすぎている感はある。しかも、そんな前例を作ると、ヨーロッパの多くの国々は、あっという間に破産してしまうだろう。

彼らの反人道的な行為が実施された場所は、カリブ海諸国だけではない。特にイギリスが行った「アヘン戦争」は、非道という点では、右に出るものが無い。

しかし、アヘン戦争に関しては、中国はイギリスにもっと食いつけばよかったのに、何故か、さっさと水に流してしまった。どうも理解できない。あるいは、上には上がいるということだろうか。

どちらを向いても、世界には、善良な日本人には到底太刀打ち出来ない国が多すぎるようだ。



中国が、日本に復讐を誓って戦争を仕掛けてきたのは、中華秩序をぶっ壊した日本へ恨みを晴らすためである。すなわち、「沖縄処分」と「日清戦争」の敗北によって中華秩序を破壊されたからである。

中国の帝国主義的膨張主義は、ほとんど海軍力の充実に向けられている。さすがに米国も堪忍袋の緒が切れたようだ。親中派のキッシンジャーでさえ中国に批判的である。

ともかく、アヘン戦争から日清戦争までの近代で、中華秩序が粉碎された。中国は米国に挑戦状を突きつけ、国際秩序の破壊と、自らを中心とする新秩序の構築を始めようとしている。(以上「なぜ中国は覇権の妄想を止められないのか」 石平 PHP 新書より)。

執念深さは彼らの DNA で、我々から見ると、もはや精神病理学の範疇に入る。彼らはトクにならないことをするはずがない。憎しみはビジネスであるということを、日本人は全く知らない。これほど長期にわたって人の憎しみを助長し、増幅させる謂れは何か？日本人への怨念と、軽蔑と、嫌悪の情を人民から絶やさないように、常日頃のリフレッシュを怠らず、差別を正当化させる謂れは何か？

中国人や朝鮮半島人にとって、未来永劫、末代の末代まで日本人を晒し者にしておかなければならない謂

れはなにか？自分たちの悪はすべて棚上げにして、である。

答えは簡単である。金儲けのビジネスだからである。……(以上「日本を捨てて、日本を知った」 林秀彦 草思社 より)。

ポーランドに行くと友人に言ったら、即座に「車、盗まれるよ」と言われた。ポーランドではしょっちゅう車が盗まれるというのは本当だという。その証拠に、ポーランドに行くとすると、車を貸してくれないレンタカー会社も多いという。

知り合いのドイツ人は、バンでポーランドに入り、キャンプ場で、車の横にテントを張り家族で寝ていたが、翌朝目を覚ましたら、車がなかったという。

また、レストランで窓際に座り、外に駐車した車を視野に入れつつ食事を済ませ、外に出たら、車はなぜかなくなっていたという。

泥棒が多いのはポーランドだけではない。……。

19世紀、日本は、ヨーロッパの芸術家たちにとって、エキサイティングな存在だった。ゴッホは浮世絵を集めていただけでなく、懸命に模写し、そこに書かれている日本語の文字まで熱心に真似た。

浮世絵や日本美術から影響を受けた画家は、ゴッホだけではない。ロートレック、ゴーギャン……、モネは自分の庭の池に太鼓橋を架けた。

しかし、その浮世絵を、当時の日本人は価値のないものと思っただけで、その結果、多くの作品が二束三文で海外に流出した。日本人が、和より洋のほうが高級と思い込んだのはなぜだろう。

誰の真似もせず、独自に作り上げた日本の芸術は、ヨーロッパ人の憧れの的となるほど素晴らしいものだったのに、当時の日本人はそれに全く気付かなかった。その呑気さ、鷹揚さは、実は、今も余り変わっていないのではないか。

「日本には、有形無形の大切なものが沢山ある。その貴重な財産を再び二束三文で流出させたりすることのないよう、私たちはもう一度、日本という国と、日本人の心をしっかりと見直すべきである」という言葉で著者は本書を閉じている。お薦めの一冊である。

2015.3.25